

大阪大谷大学

平成三十一年度 入学試験問題（公募制推薦 前期）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は全部で十一ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 一 次の文章は、浅田次郎『プリズンホテル』の一節である。文章を読んで、後の問に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

赤坂クラウンホテルの若き看板シェフ・服部正彦が、わけもわからずにこの山奥の温泉場に飛ばされてきてから、半年が経つ。

総料理長の **I** ^a であつた。サセンの理由は、服部の担当した宴会で食中毒患者が出た、ということだったが、食材の鮮度には常にバンゼンの配慮をしている服部にとって、それはどうしても言いがかりとしか思えなかつた。

「しかし、おめえさんも物好きだよな。テレビや雑誌でおなじみの服部シェフといやあ、日本中の料理人で知らん者はねえ。こんな温泉宿なんざとつとやめて、帝国ホテルでもオークラでも行きやよさそうなものだが、^① いったえ何を好き好んで居座つてるんだい？」

厨房で立ち働く弟子たちに叱言を言いながら、梶平太郎は **II** の顔を服部に向けた。

服部は黙ってキャベツを刻んでいる。

ここに来てから、パリ仕込みの腕を存分にふるつたことはまだ一度もない。せいぜい逗留客に簡単なランチを出すか、気の利いたデザートを作るぐらいで、ふだんは黙々と付け合わせのキャベツを刻んでいる。

むろん本意ではない。その気さえあれば、一流ホテルが **III** を尽くして自分を迎えるであろうことはわかっている。

ここにとどまっている理由はただひとつ、口にしはしないが、この梶平太郎という板前の腕に惚れたからだ。弱冠三十歳で名門赤坂クラウンの料理長を務めた服部正彦が、**IV** ただひとりの料理人だつた。

梶の作り出す会席膳の思いもつかぬ獨創性、盛りつけの類いまれな意匠、そしてひとくち味見をしたとたんに見知らぬ世界に引きずりこまれるような深い味わいは、和洋の垣根を越えて服部をとりこにしていた。

「だが、天下のクラウンホテルつても、たいしたもんじゃねえな。たかだか総会屋にオドカされたぐれえで、あの立派な支配人さんと、かけがえのねえ名コックとの二人を、雁首そろえて、はいどうぞと差し出しちまうなんてよ」

総会屋とは、このホテルのオーナーの木戸仲蔵のことである。もちろんそう呼ぶ梶に、悪意はない。

しばらく服部の手元を見つめてから、梶板長は糸のようにみごとに刻まれたキャベツを指でつまんだ。

「腕はたしかだが、道具が悪いな。見せてみる」

服部は包丁を止めた。それはかつて修業したパリの高級レストランのシェフから、餞別^②に贈られたドイツ製の名品である。道具が悪かろうはずはない。

梶板長は手拭で牛刀の刃を拭うと、蛍光灯の光にかざした。

「なるほど。悪いつてほどじゃねえが、こりゃ西洋人が力で使うもんだ。おめえさんの手にや合わねえ。③ どうりで切り口が甘い」

よく切れていない、という意味であろうが、もちろんそんなふうには包丁づかいを指摘されたのは初めてである。

おい、と梶は弟子のひとりを呼び、カミダナを指さした。弟子は細長い桐箱をうやうやしく捧げ持ってきた。

④ 小僧どもにやまだ触らせることもできねえが、おめえさんなら良かろう。使ってみろ

蓋を開けると、白布にくるまれた和包丁が現れた。梶はまるで日本刀の鞘でも払うように、ていねいに布を解いた。

「これは……？」

服部は V。手にするまでもなく、刃から微かな風が吹いて頬をなぶったような気がした。

「知ってるか。これが千代鶴の本鍛えだ」

「えっ、千代鶴！……千代鶴是秀ですか」

差し向けられた柄を安易に握って良いものかどうか、服部は迷った。

それは明治の廃刀令で職を奪われた江戸の名刀工、長運斎綱俊が後年「是秀」と銘を変えて打ったという、伝説の包丁である。

俗に「千代鶴」と号されて伝来するその稀少な包丁を、服部は一度だけ、日本橋の老舗の鍵のかかったショーケースの中で見たことがあった。

服部は首のナフキンをはずし、手を拭ってから包丁を押しいただいた。

「べつにそれほど緊張することはねえよ。これだって道具のうちだ」

日本橋の刃物屋のそれには、「非売品」と但し書きが付されていた。服部が値打を訊ねると、老店主は誇らしげに、「一億積んでも売れやしません」と答えたものだった。

「これは、すごい……もう、包丁じやないですね……」

名工の打ちおろした本鍛えの地鉄は淵を覗くように深く、流れるような柁目が立っている。刃の輝きはとうてい百年の時を感じさせない。その悠揚せまらざる気品と風格に、服部はおののいた。

「俺もめつたには使わねえ。去年、桜会の相良総長がおいになったときに使ったきりだ。ご挨拶に伺ったとき、このお客さんに使わせてもらおうと思ったからな——さ、試してみな」

服部は柄元にうがたれた「千代鶴」の銘を見つめたまま、しばらくためらった。

「どうしたい。ぶるつちまったか」

「いえ——試させていただきます」

俎板に刃を置く前に軽く振ってみた。絶妙のバランスだ。手首を包丁にすげかえたようなミツチャク感がある。

キャベツの上に刃をおろしたとたん、天然の幾万の繊維がいつせいに断ち切られる音を、服部ははつきりと指先に感じた。「生簀の魚を切るとよくわかる。どの魚もてめえがさばかれたとは知らずに、長いこと生きているからな」

二、三度キャベツを切つて、服部は手を止めた。ひと刻みごとに、自分の身丈が縮んで行くような錯覚にとらわれたのである。

「ぼくには、まだ無理ですね。ありがとうございました」

梶板長は包丁を受け取ると、ふしぎそうに服部を見た。

「そうか？ 自分で無理だと決めてやしねえか」

「いえ、技術とか腕とか、そんなのじゃなくって、厨房での苦勞が足らんです。よくわかりました」
刃を拭いながら、梶は微笑んだ。

「さすがに天才シェフと呼ばれただけのことはあるな。やっぱりクラウンホテルは人を見る目がねえ。おめえの腕を知っていいや、かわりにホテルを一軒まるごと差し出した方が、ずっと得だったのにな」

「どういうことでしょうか」

「これの切れ味がわかるのは、おめえの腕が確かだからだ。俺もおめえさんの年頃に、先代の板長からこいつを試させてもらったとき、そっくり同じことを言ったっけ。板場の修業が足らんのです、よくわかりました、ってな」

服部はぼんやりと、梶板長の頑固な顔を見つめていた。

問一 二重傍線部 a、e の片仮名を漢字に直せ。

問二 空欄 に入る語句として最も適当なものを、次のア～クの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ア 泰然自若 イ 三顧の礼 ウ 頑固一徹 エ 鶴の一声
オ 甲かぶとを脱いだ カ 襟えりを正した キ 息を詰めた ク 氣きを揉もんだ

問三 傍線部①「いってえ何をすき好んで居座ってるんだい？」と梶平太郎は言うが、服部正彦がこの山奥の温泉場にいる理由を、本文中から抜き出し、二十字以内で答えよ。

問四 傍線部②の格助詞「に」と同じ用法のものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 朝六時に起きる。
- イ 戸外で風に吹かれる。
- ウ 夜更けて雨になる。
- エ 新人を主役に使う。

問五 傍線部③「おめえさんの手にや合わねえ」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 服部は修業中に、西洋人のような筋力をつけなかったから。
- イ 服部は手が小さくて、西洋人の使う包丁は大きすぎるから。
- ウ ドイツ製の包丁は良いものであるが、服部の手には余るから。
- エ 服部は日本人なので、西洋人のように力で包丁を使わないから。

問六 傍線部④「小僧ども」とはだれのことか。本文中から四字で抜き出して答えよ。

問七 傍線部⑤「包丁じゃない」とは、何が、どのような様子であることを示しているか。本文中の語句を用いて、二十五字以内で答えよ。

問八 傍線部⑥「自分の身丈が縮んで行くような錯覚にとらわれた」理由として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 妖力を持つ「千代鶴」に触れると、力を吸い取られるような気がしたから。
- イ 「千代鶴」の器に見合うだけの経験が、自分にはないと思ったから。
- ウ 洋食を作る修業はしたが、「千代鶴」は和食を作るための道具だから。
- エ 梶板長が自分の手元を見つめている敵しい視線に堪えられそうもないから。
- オ 普段使うドイツ製の包丁より優れた「千代鶴」を見て恥ずかしくなったから。

問九 傍線部⑦「梶は微笑んだ」とあるが、この時なぜ梶平太郎は微笑んだのか。その理由となることを二点、本文中の語句を用いて、五十字以内で答えよ。

㊦ 次の文章は、釘原直樹『人はなぜ集団になると怠けるのか』の一節である。文章を読んで、後の問に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

あるインターネット広告代理店で社員の一部に約二週間、仕事内容を記録してもらった結果、会議が一日に占める割合は三割ということであった。このように会社によっては会議が仕事時間に占める割合が大きいところがある。

それにもかかわらず参加者が居眠りをしたり、内職をしたりするような会議もある。また一人の **I** により、他の人はひたすらそれに耐えなければならなかったり、出席者が多くて話し合いにならないこともある。さらに責任を回避するために、容易に決定できる内容にもかかわらず結論が先送りされることもある。 **A** ブレーン・ストーミングのように活発な議論がなされ、出席者もその場では満足感を味わうが、後に冷静に検討すると議論の自身が **a** センパクで、結局、問題解決に結びつかないこともある。

このような非効率的な会議の背景には、共通して社会的な手抜きが働いていると考えられる。社会的な手抜きとは、 **X** **□** で仕事をするときのほうが一人でするときよりも一人当たりのパフォーマンス（業績）が低下する現象である。

集団の中に **b** マイボツして他者の目を気にしないで済む状況では、人は **よこしま** 邪なことを考えたり、反社会的行動を行ったり、仕事をサボったり、手抜きをするような存在であるという考え方があられる。そのような行動に関連することわざとして「 **II** 」「小人閑居して不善をなす」というものがある。 **B** 、「お天道様が見ている」「天網恢恢疎にしてもらさず」などは、そのような心性に対する戒めの箴言である。

ただし、意図的に「不善」をしているつもりはなくても、他の人と一緒に作業をしていると思っただけで、人は無意識に手抜きをしてしまう。その原因として「自分が頑張っても、それが集団全体の業績にはあまり影響しない」という「道具性」 **c** ケツジョの認識、他の人がしっかり仕事をしているので自分が頑張る必要はないと感じる「努力の不要性」の認識、たとえ頑張ってもそれが他の人にはわからないので評価されないという「評価可能性」ケツジョの認識などが挙げられる。これから紹介する社会的な手抜きに関する実験や調査はこのような要因がかかわっているものがほとんどである。

次のような実験がある。この実験では、チアリーダーをしている米国の女子高生が対象となった。チアリーダーや応援団は大声を出したり、手を叩いたり、足を踏み鳴らしたりして場を盛り上げる。大きな音を立てることもパフォーマンスの重要な要素の一つである。実験者はチアリーダーの寮に行き、「大声をあげながら手を叩くというパフォーマンスをあなたたちがどの程度できるか、確かめたい」と説明し、実験に参加してくれるように頼んだ。

実験は二人一組で行った。実験室には衝立と二つの椅子があった。被験者が実験室に着くと、ヘッドフォンと目隠しが渡され、それを装着した。実験条件は一人で音を出す（大声を出し、かつ手を叩く）単独条件と、疑似ペア条件の二種類であった。疑似ペア条件とは、実際は一人で音を出しているのであるが、当人は衝立をはさんで隣にいる他者も音を出していると思いついて聞かれないように「これから隣の人（B）だけが音を出すことになっているから、あなたは黙っていてほしい」と伝え、Bには、Aには聞こえないように「二人とも音を出してもらおう」と伝える。C BはAと一緒に音を出していると思いつているが、実際にはBだけが音を出す条件である。

被験者はヘッドフォンを通して、カウントダウンとそれに続く録音された大音響（六人が叫びながら手を叩いている）を聞かされた。被験者Bはカウントダウン終了直後の大音響と同時に力いっぱい大声を出し、手を叩くように要請されていた。両者にヘッドフォンを通して大音響を聞かせるのは、他者の行動がわからないようにして、実験操作を被験者にさとられないようにするためである。このように手の込んだ操作をしたのは、他者の存在を思い込むだけで、パフォーマンスに影響が出るのかイナカを確認するためであった。実験の結果、疑似ペア条件は単独条件の九四%の音量しか出しておらず、手抜きをしていることが明らかになった。ただし、意識のレベルではほとんどの被験者が自分も相手も全力を尽くしたと思っていた。そしてそのような実験手法を用いて集団サイズの効果を検討した結果、他者が一人いると思いつ込んだ場合のパフォーマンス量は個人単独の場合の八二%となり、五人の他者がいると思いつた場合には七四%となったのである。

D、このような社会的な手抜きはどのような課題で生じやすいのであろうか。チアリーダーの発声も綱引きも、多数の人が力

を合わせる課題である。また個々人の力は集団全体の中に埋もれてしまっはつきりしない課題でもある。E、集団の課題は

このようなものばかりではない。社会的手抜きが生じやすい課題の特徴を明確にするためには、Y。

この点について考察したのが米国のスタイナーである。彼は課題を三つの次元から分類した。

第一は、課題の構造に関連した次元であり、課題が分割できるか、分割不可能かという次元である。家を建てる場合、大工、III、配管工事担当者、電気設備工事担当者、庭師などさまざまな人が別々の仕事を担当する。オーケストラも楽団員は別々の楽器を担当している。このように仕事を一つ一つ別々の個人に割り当てることができる課題は分割可能課題である。それに対して、一人の画家が一つの絵を描いたり、俳優が一つの役を演じるような場合は分割不可能課題である。

第二は、生産物の性質に関するもので、質が問われる課題か、量が問われる課題かの次元である。ある課題では生産量がパフォーマンスの指標となり、その最大化が目指される。量が問われる課題の場合、外的基準は明確な場合が多い。量の大小はわかりやすく判断に迷うことは少ない。ブレン・ストーミングの場合でたくさんのアイデアを出す課題や売上高を競うような課題ではその量の多寡はIVである。それに対して質が問われる課題は明確な外的基準がないことが多い。記述式問題の解答やフィギュア・スケートのパフォーマンスの採点をする場合、判断のルールは定められてはいるが、結局は採点者の主観的印象に基づいて行われる。

第三は、個人の Kouken が集団全体の成果にどのように結合するのかに関する次元である。結合のタイプから課題を分類した場合、加算的課題、補正的課題、分離的課題、結合的課題、任意的課題となる。

問一 二重傍線部 a ~ e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 I く IV に入る最も適当な語句を、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

I	ア 長広舌	イ 口八丁	ウ 一家言	エ 出世欲
II	ア 蛇 <small>じや</small> の道は蛇 <small>へび</small>	イ 昔取った杵柄 <small>きねづか</small>	ウ 旅の恥は掻 <small>か</small> き捨て	エ 盗人 <small>ぬすびと</small> に追い銭
III	ア 神主	イ 職人	ウ 易者	エ 左官
IV	ア 五里霧中	イ 一目瞭然	ウ 一挙兩得	エ 雲散霧消

問三 空欄 A く E に入る最も適当な語句を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ（但し、同じ記号は二度以上使えない）。

ア したがって イ あるいは ウ しかし エ いっぽう オ それでは

問四 空欄 X に入る最も適当な語句を、本文中から抜き出し、二字で答えよ。

問五 傍線部①「被験者B」とあるが、これと組になった被験者Aは実験中、どこで、どのような状態で、何をしているか。被験者Bとの位置関係に言及しながら、本文中の語句を用いて、五十字以内で答えよ。

問六 傍線部②「課題」とあるが、これと同様の意味で用いられている語句を、傍線部以降の本文中から抜き出し、二字で答えよ。

問七 空欄 Y に入る最も適当な文を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 何か別の要因を考慮するのが適切である
- イ 課題の性質について整理する必要がある
- ウ これよりも複雑な方法が存在するだろう
- エ 課題の性質を単純化しなければならない
- オ 集団全体に個別な要因を発見すればよい

問八 傍線部③「結局は採点者の主観的印象に基づいて行われる」とあるが、なぜそのようなになるのか。その理由が書かれている部分を本文中から抜き出し、解答欄に合う形で、二十五字以内で答えよ。

問九 本文の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 会議の時間の占める割合が大きい会社は集団的手抜きをする社員が多い。
- イ 集団的手抜きのほとんどは、多数数で力を合わせる課題で起こっている。
- ウ 集団的手抜きは、当人に悪気がなく、全力を尽くす場合にも起こりうる。
- エ 集団のパフォーマンスは人数に比例してパーセンテージが上がってゆく。